読者の「リアル」を大調査

婦人公論 女性の生き方研究所 vol.13

あなたにとって「家事」とは？ 中篇

創刊以来、〝女性の生き方研究〟を積み重ねてきた『婦人公論』。この連載では、読者のみなさんへのアンケートを通して、今を生きる女性たちの本音にせまります。前回に引き続き、家事に関するアンケート。できればやりたくない、でもやらねばならない……そんな苦しい胸のうちを

回答者数288人　平均年齢▼62・8歳
回答者の内訳▼60代…95人　70代…60人　50代…49人　80代…31人　40代…20人　30代…18人　90代…4人　20代以下…9人　不明…2人

Q できればやりたくない家事は？ また、その理由も教えてください

1位 風呂・洗面所の掃除……83人
やってもやっても終わらないところが虚しい（62歳・パート）／加齢のため、だんだん億劫になってきた（58歳・パート）／腰が痛く、毎日かがむのがつらい（83歳・専業主婦）／カビが取れない（61歳・無職）

2位 アイロンがけ……56人
たった1、2枚なのに、アイロン台など用意するものが多いのが嫌（58歳・会社員）／きれいに仕上がらず、イライラする（69歳・年金受給者）／スチームで簡単に衣類のケアができる機器があるのは知っているが、昔ながらのアイロンがまだ使えるので、買い替える気になれない（62歳・パート）

3位 食事作り……55人
365日、献立を考えるのが面倒（85歳・年金受給者）／共働き夫婦なのに、夫は帰ってきて食べるだけという不公平さに腹が立つ（63歳・ケアマネジャー）／孫たちはがっつり系が好き、夫はあっさり系が好きなので、作る品数が多い（69歳・専業主婦）／準備には時間がかかるのに、食べるのは一瞬。儚い（63歳・無職）

4位 トイレ掃除……51人
洗剤で手が荒れる（57歳・会社員）／ついつい後回しにしてしまって、後悔する（78歳・年金受給者）／トイレが3つあって使用する人も違うので、各人で掃除をしてほしい（65歳・年金受給者）

5位 食事の後片づけ・皿洗い……45人
本当に面倒くさい！　できることなら紙皿、紙コップ、割りばしにしたいくらい（60歳・専業主婦）／食後という一番気持ちいい時間での労働なので（66歳・年金受給者）／私が後片づけをしている間に夫はお風呂に入り、寝室へ直行。自分が家事ロボットみたいで嫌だ（65歳・専業主婦）

Q 以前はやっていたが、今はやめた家事は？

【アイロンがけ】
夫の定年後、ワイシャツ類のアイロンがけが必要なくなった。自分の綿ブラウスは干す前に繊維に沿ってピーンと伸ばして、できるだけシワが寄らない干し方にしている（67歳・専業主婦）

【食器洗い】
皿洗いは食洗機にお任せ。そのほうが水道代の節約になる（38歳・自営業）

【風呂掃除】
私の住んでいる地域では、65歳以上は月6回まで1回100円で銭湯を利用できるので、それをうまく使っている（89歳・無職）

【食事作り】
ヘルパーさんが買い物と掃除に来てくれるので、食事はチンするだけ（91歳・年金受給者）

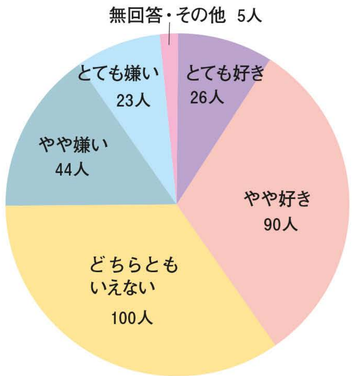
【洗濯物干し】
洗濯乾燥機を買ったら、ずいぶん家事がラクになりました（78歳・年金受給者）

【食事の片づけ】
夕食の後片づけ、皿洗いは夫の仕事になったので、私はいっさい手を出さないことに（70歳・専業主婦）

【掃除】
掃除中にギックリ腰になってから、掃除は月に3回ほどにして、あとは目についた時にサッとハンディモップで済ませるようにした（68歳・年金受給者）

【掃除機かけ】
廊下・和室はロボット掃除機を使用しています（73歳・パート）

Q あなたは家事が好きですか？



婦人公論ヒストリー

家事嫌いのための「家事」

サボりかた教えます

戦後の経済成長とともに、『婦人公論』の誌面は変化していきます。1950年代から60年代にかけて、暮らしのノウハウ記事も増えました。「家事」が初めて特集されたのは、69年5月号です。タイトルは「家事嫌いのための家事」。冒頭の記事「花森安治から犬養智子へ」（丸山邦男・著）では以下のように世相が綴られています。

〈先ごろ犬養智子さんの『家事秘訣集』という本が発売され、たちまち十数万部のベストセラーになったそうだ。（略）家事のサボりかた教えます…という〝秘本〟が、若い主婦たちの間で爆発的な評判になったということは、家事という得体の知れぬ仕事のわずらわしさから、（略）未だに解放されていないことを物語っている〉

一方、暮らしの専門家として当時人気を博していたのが『暮しの手帖』を創刊した花森安治です。54年から始めた「商品テスト」が当たり、〈私設公正取引委員会の商品検察官のような奮闘ぶり〉でした。そんなハナモリイズムとイヌカイイズムの違いはどこにあるのか。筆者は花森の哲学には〈なにがなんでも消費を押しつけようとする経済暴力にたいする怒りと抵抗精神〉があり、犬養の哲学には〈家事などという雑用の集積なんて、はじめから主婦の役目とは考えない、大胆な戦後派的な発想〉があると分析しています。

気まぐれ主婦礼讃

本特集には、海外の話題書の翻訳記事も掲載されました。それは「家事を5倍楽にする法」。58年に出版され、全米でベストセラーになった、ペグ・ブラッケンによる『The Hate to Housekeep Book』の抄訳です。〈主婦には、三つのタイプがあります。かたとき も手を休めずに家事をこなす優等生の主婦。反対に、さっぱり家事をしようとしない落第生の主婦。いまひとつは、優等生になったり、落第生になったりする気まぐれな主婦です。この気まぐれな主婦のために、家事について書いてみました〉

本記事を翻訳したのは「グループ・RH」。記事の末尾には、「気まぐれ主婦礼讃」と題し、本記事を翻訳するに至った経緯が綴られています。RHは「気まぐれな主婦のあつまり」（The Random Housekeepers）の頭文字だとか。アメリカ人の主婦から教えられたこの本にグループRHの5人は魅せられました。

〈やかんやお鍋は見えないように戸棚か引出しにしまうこと。（略）人の見えるところにかけておいていいのは、底をみがくのが好きな奥さまのところだけです〉

〈念入りな掃除は、その都度ちがったところからお始めなさい。（略）二、三時間もすれば疲れていやになります。このルールを頭においてとりかかれば、少なくとも同じ場所でやめることはなくなります〉

〈どこかにおき忘れたものをさがし廻って、時間を浪費するのはおやめなさい！（略）気にしないで放っておけば、まもなくでてくるものです〉

〈とにかく忘れてはいけないことは、あなたは正直のところ、家事を完璧にやりとげる奥さんになりたい、とは思ってはいないということです〉

今回の「あなたは家事が好きですか？」のアンケートでは、「どちらともいえない」が最も多い回答でした。現在のRHたちにもブラッケンの言葉は響くでしょうか。

「家事を5倍楽にする法」（69年5月号）。目次には、「同じことの繰返しにうんざりしている気まぐれ女性のためのアドバイス」とある

次回は「使ってみたい家電や外注サービスは？」の回答をご紹介します